第5部

2. 理性的魂と身体の結合の意味

ぼくは、技術者として、マネジャーとして、中小企業経営支援者として50年近くの年月を産業界で生きてきました。そんな生き方には、神とか魂といったものが思考の中に入り込んでくることは全く無かったと言ってもよいでしょう。

科学的思考や工学的論理が優位にあり、かつ力を持つそんな世界でも、人間の心や内面に入り込まなければならないことがいくつも有りました。営業活動とか、人事とかです。クレームへの対応もその一つであり、これがぼくに大きな影響を与えました。

クレームの発生には必ず人間感情が絡んでいますから、科学的な検証や論理的な説明だけでは解決できないのです。相手の心の中にあるものを的確に読み取り、理解し、それを解くことが解決につながるのです。

クレーム対応を積み重ねる中で、ぼくは心理学の世界へ入っていくことになりました。そしてユング心理学に出会ったのです。ユング心理学の諸著作を漁る中で河合隼雄氏の著作に出会い、その中で現象学を知りました。

現象学の著作を読み漁ることが、メルロ＝ポンティという稀代の現象学者の思想や、構造主義の大思想家レヴィ＝ストロースへの道を拓いてくれたと感じています。こうした遍歴の中で次第に大きくなってきたのが、西欧近代主義への疑問でした。

西欧近代主義への疑問を持つと、その原点を知りたいとの誘惑から逃れられません。ベーコン、デカルト、ホッブス、ロックへの接近はそこから始まりました。膨大な著書を精緻に読みこなすことは、ぼくにとっては不可能だと思いましたが、西欧近代主義の原点としてあまりにも有名な言葉「われおもう、ゆえにわれあり（コギト エルゴ スム）」を発したデカルトについてはもっと詳しく知りたいと思いました。

そこでぼくは「方法序説」を選びました。これだけは精緻に読もうと心に決めました。そして今これを書いています。400年近くも前に、20才代からこうしたことに取り組み、これだけのことをやってのけたデカルトには畏敬と敬服あるのみです。

デカルトから得るものは、文章で語られていることに限られる訳ではありません。文章で語られている多くのことが、さらに上位の文脈を構成して何かを表現しています。その何かの意味を掴むことができれば、西欧近代主義の開祖たちが意図していたことと、西欧

近代主義を基盤として作られてきた現代社会との違いが見えてくると感じています。

前章までの内容から感じ取っていただいていると思いますが、ぼくが感じていた疑問は西欧近代主義そのものにあつたのではなく、400年近くにわたってこれが築いてきた社会にあつたと認識するようになりました。

クレームから始まったぼくの間人研究が、こんなところにまでに至るとは思いもよりませんでした。産業界というリアルな世界で生きてきた人間にも、こんな転換があつたことが不思議に思えますが、西欧近代主義の開祖たちも戦争社会というリアルな世界で生きていたことを考えますと、不思議なことではないのかもしれないかもしれません。

神の定めた諸法則に従って形成される世界についてデカルトが行つたことは、思考実験だと言えます。ある前提を設け、その時点で保有している知識の全てを動員し、理性の力をフルに発揮し、物事の展開の帰結を推理するのが思考実験です。

彼の思考実験には、先入見を取り除く努力がなされていました。それは、“世界を構成するのに十分な物質の中には、学校で議論されている実体的形相や実在的性質などは一つもなく、その物質を認識することが私たちの魂に生まれつき具わっており、知らないと仮想もできないものは一つもない”と、はっきりと想定したことに現れています。

こうした前提の下にデカルトは、自分の定めた方法論と基本原理に従って思考し論を進め、一つ一つ明らかにしていったのです。それは、自然の諸法則、地球や天体のこと、植物のこと、動物のこと、そして人間のことについてでした。

彼の思考の進路に立ちはだかつた最後の壁は、人間の理性はどのようにして創造されたのか、という命題でした。人間や動物の身体の機能、機械の機能、人間の心の機能、動物の心の機能、といったものについての思考を深めることを通して、彼はこの命題を解くことに取り組んだのでした。

その到達点が、人間だけが持つ“理性的魂”という概念であり、この“理性的魂”が他のもののように物質の力から導き出されることは決してあり得ず、特別に創造されねばならないということでした。そして、特別の創造者を“神”と呼んだのです。

こうした思考と論述の内容をデカルトは「世界論」としてまとめました。しかし、彼は「世界論」の出版を控えたのです。その理由は、宗教裁判によるガリレイの断罪でした。このことが、「世界論」がどのような性格の著作だったのかを示しています。

「世界論」の中にも、ガリレイなみに、当時としてはかなり冒険的な考え方や思想が表明

されていたということです。即ち、事実だけが取り上げられていたのではなく、彼の思考と推論の到達点や特異な主張が述べられていたということです。

ここで、デカルトの思考と推論がどのようにして進められたかを整理してみます。

- ・第一の真理と認められるものから演繹し、他の数々の真理を導き出す。
- ・導き出された真理に基づいて、物質的事物の本性について明らかにする。
- ・世界を構成するのに十分な物質の存在を前提として、神が定めた法則に従って動くに任せた場合の混沌たるカオスが支配する世界の中で起こるはずのことだけを、自分の自由な判断を通して明らかにする。その際、これらの物質の中には、学校で議論されている実体的形相や実在的性質などは一つもなく、一般的に、その物質を認識することが私たちの魂に生まれつき具わっており、知らないと仮想もできないものは一つもないと考える。
- ・自然の諸法則が何かを示す。
- ・神の無限の完全性という原理のみに論拠を置いて、少しでも疑いをはさむ余地のある法則は、これを全て証明する。
- ・「これらの法則は、神が多数の世界を創造したとしても、これが守られない世界は一つとしてしてあり得ない」ことを示す。
- ・このカオスの物質の大部分が、これらの法則に従って、どのようにして一定の仕方であり、並び、連なって、我々の天空に似たものになるはずかを示す。
- ・神の存在と魂の存在を証明する。

こうしたデカルトの推論の仕方を、ぼくは学生時代に“演繹法的思考”だと教わりました。この推論の流れを見ますと、確かに演繹的に思考を進めていることが窺えます。しかし、その思考だけでこの推論過程が完結するとは思えないのです。

デカルトの哲学を、“演繹的”とか“合理主義”といった言葉で表現するのは妥当なことだろうと思います。彼の哲学の軸となる部分を、これらの言葉が的確に捉えているからです。しかし、こうした言葉による命名によって彼の哲学を狭く捉えることには納得がいきません。

方法序説に書かれている彼の思考と行動を合わせた全部が彼の哲学なのです。デカルトの哲学は「われ惟う、故にわれ在り」だけではないのです。上記の思考と推論が進められる過程には、「われ惟う、故にわれ在り」を超える多くのものがあつたはずで、そういうもの全てを「われ惟う、故にわれ在り」という軸の周りにつなぎ合わせて捉えることができるものが、デカルトの哲学だと受け止めたいのです。

方法序説・第5部の最終節には、真の人間であるためには、理性的魂が身体と結合し、より緊密に一体となる必要があると書かれています。また、私たちの魂が身体に全く依存

しない本性であり、身体とともに死すべきではないことが理解される、とあります。

この二つの文章表現には矛盾があることは誰の目にも明らかでしょう。前の文章表現は理性的魂が機能するためには身体と結合することが必要だと主張しています。一方、後の文章表現からは魂が身体に全く依存せずに存在すると読み取れます。

ダマシオの「デカルトの誤り」は後の文章表現の内容を指摘したものです。現代の脳科学の成果から言えることは、心（即ち魂）は身体と結び付いてこそ存在するものであり、機能するものなのです。デカルトの時代の脳に関する科学的成果からは、魂は「物質の力から導き出されることは決してあり得ず、特別に創造されねばならない」と受け止めるしかなく、身体と区別されることになったのでしょう。

しかし、デカルトの哲学の生成過程から言えることは、やはり前の文章表現が適切だということです。デカルトの哲学は、特別に創造された理性的魂がデカルトの身体と結合し、身体による知覚と行動に依拠して理性的魂の思考が生み出したものだと受け止められるからです。心（即ち魂）の存在については、現代の脳科学に任せるのがよいでしょう。

ここで、「われ惟う、故にわれ在り」とは、理性的魂が自認する自分が、この現存する自分であると確信する理由であることを再確認したいと思います。これに、理性的魂が緊密に一体化した身体の知覚と行動が加わり、多くの概念が生み出され、哲学が創成されていったのだと思います。

こうしたことから浮かび上がってくる一つの疑問は、デカルトの思想は西欧近代主義の基盤となりましたが、西欧近代主義に依拠した文明を基盤に置いて築かれた現代社会は、デカルトの思想から外れてしまったのではないかということです。

デカルトの思考と行動とを合わせた思想から感じ取られることは、「われ交感し、そして惟う、故にわれ在り」です。一方、現代社会の底流にあるものから感じ取られることは、「われ惟う、故にわれ在り」なのです。デカルトにおいては自分が自分であることの理由とされていたことが、現代社会では全てを支配する思考と行動の原理となってしまったのです。

新たな社会に向かうためには、西欧近代主義の原点に帰ってデカルトの思考と行動を学び直し、精神と身体との結び付きを含む「われ交感し、そして惟う、故にわれ在り」という命題を自分が自分である理由として認識し直し、思考と行動の基本原理を適切に構築し直すことが大切だろうと考えています。